

---

# 三色パン 2 色目

戸木田 宗次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三色パン 2色目

### 【Nコード】

N4103BA

### 【作者名】

戸木田 宗次郎

### 【あらすじ】

どうして誰も教えてくれなかったんだ。

Hをするよりキスをするほうがよっぽど大変だってことを・・・。

この人間には全く無関心で視界に入っていない名前の無い町の中で  
今日も何かが起きている。

ラブホテルで、授業中の教室で、倉庫の中で、川の中で・・・？

まあ、なんだ。

ゆるくないゆりは、痛いだけだよ。

## 裏切の美德

2 色目

『裏切りの美德 1』

どうして誰も教えてくれなかったんだ。

Hをするよりキスをするほうがよっぽど大変だったことを・・・。

この人間には全く無関心で視界に入っていない名前の無い町の中で

絶滅危惧種の少数派人種がいる。

それを他の一般的な世の中では『ストーカー』と呼ぶそう。

まあ思い返せば俺がいた中学校は男子中だった。性に敏感なお年頃だと

いうのに、毎日毎日

顔を合わせるのは野郎だけ。

しかも酷いことに学校には男の教師しかいないため、全てにおいて

暑苦しい中学生時代を送らされた。

しかし中学生の性に関する興味は並々ならぬモノがあり、

耐え切れない奴らはよく同級生を体育倉庫や放課後の教室で襲っては

溜め込んだ熱を襲った生徒の中へぶちまけた・・・とかいう噂も

あったが、どうなんだろう。

ただ、まあ同じ男子中学生でありながら異様に女のような顔立ちを

した奴や、普通の顔して全身から言葉に出来ないフェロモンのような

ものを醸し出していた奴もいたし、もしかしたらもしかするのかも。

現に、俺の真後ろにはそういう事例の奴が一人付きまとっている

からな・・・。

「・・・」

「・・・」

なにしてんのあの人・・・。

「纏伊まとい・・・何か用？」

「・・・」

俺の問いに纏伊は首を左右に振る。ていうか用が無いなら

後ろについて回るのやめて貰えないでしょうか。

「纏伊、違う高校だろ？方向逆だよな」

「．．．っ．．．っ．．．」

何だって？

「．．．ぶ．．．文遠．．．って．．．呼．．．んで」

「．．．」

俺の話は無視か。

「．．．っ．．．っ．．．っ」

「何？」

「．．．き．．．きお．．．気をつけ．．．て．．．」

「何に」

「．．．っ．．．っ．．．」

「ス．．．ストー．．．カー．．．」

それはお前だろう。

「あー．．．分かった分かった。じゃあストーカーに気を付けるから、」

纏伊はさつさと学校へ行けよ

（訳：俺から離れるよストーカー野郎）

「っ……っ……っ……」

挨拶でも言ってるのか？はぁ……もう付き合ってたらねーな。

「じゃあな、纏伊！俺はこれから嫁さんを迎えに行くんで！」

「……！！！！！」

纏伊の表情が強張った。やはり「俺の嫁さん」というフレーズに  
相当な打撃を受けたようだ。

まあ、当然だろ。俺の嫁さんは3枚の御札並みに強くてそして……  
そして何よりかわいいんだからな！

デヘヘ

気持ちがよくなった俺は纏伊を無視して嫁さんの自宅へ向かって走り  
出す。

あいつも所詮はいち高校生。

登校時間になれば嫌でも自分の学校へ行くだろう。

ああ……今日も爽やかで清々しい朝だ。待っていてくれよな、

俺の嫁さん！！！！

「……………つ……………よ……………嫁……………嫁は……………げ……………」

元凶……………う……………うう……………」

雲長を……………こ……………殺……………つつつ！！！！！！！！！！」

電柱の後ろに隠れてブツブツ喋っている気持ちの悪い奴を見かけた。

今日も最悪だ。早く最高の日を迎えたい。



そう思いながら、私は学校の反対方向へ歩き出す。

## 裏切の美德

2 色目

『裏切りの美德 2』

小学校時代、保健体育の先生（女）が女子に向かって言っていた。

「口でさせてくれと強請るような男は碌な奴がないから、そんな奴の言うことは

聞いてはいけない」と。

先生・・・あれから数年、俺は碌でもない男になりました。心だけ。

嫁さんとはクラスが違うので、授業中は退屈極まりない。

こういった町だから授業中誰かが教室から出て行っても教師は何も言わないし、

教師もただ教科書を読み上げているだけで勉強を教えようって気など初めから

持ち合わせていないという学級崩壊の前に既に根本から崩壊している俺たちの学校。

この町にある学校はどこもそうだ。

みんな、ただ「行くように」と言われているから学校へ行き「教科書の内容を

教えるように」と言われたから教科書に載ってあるそのままの文章をそのまま

読むだけの教師の授業を言われた通りに受けて時間になれば家へ帰る、

そんな決められたレールの上だけを歩くだけのような生活を送っている。

俺は勉強がそこまで嫌いではないので教師の音読はBGMとして聞きながら

通販で購入した参考書などを勝手に授業中に開いて問題を解くのが日課。

「おい、弟塚」

声を掛けられたので顔を上げれば同じクラスの・・・えっと・・・なんとか

文則・・・？が

俺の席の前に座っていた。

あれ、俺の前の席って違う奴じゃなかったっけ？

「なんだよ。俺今忙しいんだけど」

「金貸してくんない？今日、弁当忘れちゃって」

「悪い。俺、今月色々と厳しいから他人に貸す金は持ってないんだ」

「そっかー・・・残念。じゃあ他の奴に頼むわ」

そう言っただけで文則は授業中にも関わらず部屋の中を歩き回り、クラスメイトに金の無心をしていた。

はあ、こんな状態でも教師は何も注意をしない。

本当にこの町はつくづく人間というものが視界に入っていないのだな。

ふと窓際のほうに目をやると一番後ろの席に座っている男子が女子を膝の上に

乗せながら舌と舌でレロレロしながらディープな接吻を無我夢中でしていた。

見せつけか？見せしめか？ああ？？

・・・はあ・・・俺もあんなキスをしてみたい。

「・・・嫁さん・・・」

シャーペンを置いてポケットから携帯電話を取り出して嫁さんへお誘いのメールを

送ってみる。

『午後、学校を抜け出さないかい？』

数秒後、嫁さんから返信。

『じゃあ迎えに来て』

「OK、OK。全然OK」

直ぐに返事を打ちメールを嫁さんへ送信。

はぁ・・・この胸のもやもやを晴らすには、やはり嫁さんの身体に限る。

今日も思う存分、青少年的不健全育性行為をしようではないか・・・  
グフフ・・・。

「・・・ん？」

携帯電話の振動に気付きメールボックスを開いてみると、嫁さんからもう一通

メールが届いていた。

『あ、クラスにはいないから。屋上でみんなと集会しているので屋

上に迎えに来てね』

「・・・」

愛おしい嫁さんからの返信メールも『みんな』というフレーズを見ただけで、

メールから果たし状へ変わったような気分だ。

はぁ・・・またあいつらに会わなければいけないのかと思うと、胸が苦しい。

月曜日が来て騒ぐ社会人の気持が今ならちょっとだけわかる気がした。

## 裏切の美德

2 色目

『裏切りの美德 3』

愛しすぎるのってよくないよね。だからさ、勘違いしちゃいけない。愛する君の好きな人を殺しても、君はその人からの愛を貰うことは出来ないよ。

この町は人間にとってはとてつもなく不条理な町だ。

俺の親の様に自殺か他殺か分からない遺体がでたとしても、誰も何も調べない。

ただ「死んだ」という結果が残された俺たち兄弟に差し出されただけ。

それでおしまい。

路上で遺体は何体も倒れていたとしても、みんなそれに何の感情も抱かずに横を

平然と歩く。

それでもいい加減邪魔だな、と思われたら業者に頼んで回収されていき

そのまま消去される。

『まるでデーターのようだ』とか思った時もあったが、これがこの

## 町の日常風景

なのだから結局みんな、何の疑問も抱かずに生きていく。

正しいか正しくないかなんて、そんなのどうでもいいんだ。

この町の女性はみな生まれた時から護身術や武術を教え込まれている。

なんせここまで治安が悪いのに平然を装う町だ。女性特有の事件に対する被害率も

相当な数があり、それでも誰も助けようとせず事件を放置しているのだから

年々被害者は増え町から女性は姿を消していく。

もちろん、それが町を出たのか故意に消されたのかは誰も知らないところだが・・・。

そんな女性たちの駆け込み寺的なものがうちの高校には1〜3年生、全ての学年に

存在する。

まあ言うまでも無く、その総指揮者が君ヶ主3姉妹だ。

「あ、うんこ！」



屋上に来て掛けられた第一声がうんことか・・・。

「誰がうんこだ、この小便女!!」

下品な言葉には下品な言葉でお返しですわよ。

「なにそれー、反撃のつもり?マジで意味わかんねえ」

「最初に仕掛けたのはお前だろうが!!!」

「は?うんこ呼ばわれされて怒ってんの?だって弟塚の名前ってさー雲長でしょ。」

だから、雲長 うんちょう うんちょう うんち ウンコ!

「お前の方が意味わかんねえよ」

人のことをうんこうんこ言ってくるこのくせっ毛短髪女の名は

『典型的な末っ子』翼徳。

こんな奴なのに俺の嫁さんはこいつのことをメチャクチャ気に入っていて

『人類が滅亡する寸前に最後の晩餐として翼徳のお肉を食べたい』とまで

言わせるほど。

なので毎日罵り合っている訳だが、決して仲は良くない。本当に。

「何か御用？」

声を掛けてきたのは前後両方の黒い髪の毛が尻の長さまで伸びている

『完璧女』・子龍。

こいつの表情は前髪のせいで全く見ることが出来ないが声色からして  
気が立ってそうだった。

「悪いな……。俺と嫁さん、これから授業をサボるんで。

君たちとはここでお別れ」

「成程。完璧な私が導いた完璧な答えとして、あなたと玄殿はこれから

商店街の狭間にあるラブホゾンへ向かう気ね」

「ノーコメントで」

ドンピシャなお答え、どうもありがとう。

「……あ……あなた……玄徳になんかするんでしょう……  
！！」

ガタガタと震えながらこちらを睨み付ける金髪縦巻きロールの包帯女

『極度の被害妄想者』孟起。

「まさか。俺は嫁さんを愛しているんだぜ？」

そんなことするわけないだろ。な？」

何となく誰かに同意をしてもらいたくて孟起の隣にいる『殺し損ねる女』文長と

『流浪の勇者』漢升に声を掛けたが、二人はあやとりの真っ最中で話など最初から

聞いていないようだ。なんともはや・・・

「じゃあ今日はしないの？」

彼女が声を出した瞬間、あやとりをしていた二人は手を止め震えていた人は

震えを止めて、全員が姿勢を正す。

ただ一人、俺だけは姿勢を正すことも無いまま声を発した主の元へ近づいていく。

「嫁さんはどうしたいの？」

「私はしたい」

「じゃあ、そうしよう」

「うん」

頷き、嫁さんが立ち上がると銀髪のハーフツインが可愛く揺れた。

今日も可愛い俺の嫁さん。手を差し伸べると美しいエメラルドグリーンの爪がそっと

俺の手の平に触れたから、俺はその手が離れないよう力強く嫁さんの手を握る。

「じゃあみんな、今日はここで解散」

嫁さんの指示に全員無言で頷く。

さっきまであんなだけ馬鹿なことを言っていた翼徳も今だけは真剣な表情を浮かべて

頷いている。

そんな若干重苦しくなった空気に耐え切れず、

俺は嫁さんを連れて学校を途中で抜け出した。

今日も嫁ちゃんとラブラブしちゃっぜ？

## 裏切の美德

2色目

『裏切りの美德 4』

俺の性根は腐っているから。いつも表情を表に出さない子がある日突然一瞬だけ

見せた笑顔より、醜いくらいに顔を歪めたその子の姿を見た時の方が断然

興奮する。

平日、午後、商店街の間に建つ古びたラブホテルの一室。

薄暗い部屋の中には風呂とベッド、そして革製のチェーン付き手枷と足枷がある。

まあつまりそういうプレイ専用部屋、そこに俺と嫁さんは居た。

二人とも生まれたての姿で俺の身体の上に嫁さんが乗っかりすやすやと寝息を

たてている。とてもかわいい姿だ。

俺の嫁さんの身体は言っちゃ悪いが細すぎる。女性らしい肉のふく

よかさが無く、

まるで少年のような華奢な身体つきをしていてプラス肌の白さも相まって生気が

全く溢れてこない身体をお持ちの人だ。

大抵のチャラ男はこの見た目だけで俺の嫁さんを『中の下』と評価を下しているが

全く奴らは分かっていない。

「・・・んん・・・」

まだ夢の中にいる嫁さんが動く。

その度に俺の胸板には嫁さんの大きな二つの膨らみがタプンタプンと当たる。

・・・うん・・・うん、・・・凄く・・・凄く柔らかくて・・・大きい膨らみ

なんだな、これが。

「・・・嫁さん・・・」

眠る頬にそつと触れてみる。まだ熱が引かないのかまだ頬が少し赤い。

「・・・」

頬に触れていた指をゆっくりと動かして柔らかなピンク色の唇を歌詞の様にそっと

指でなぞってみた。

瞬間、嫁さんの身体が少し震える。可愛い、本当に可愛い。

「・・・っ・・・」

だから勢いに任せて嫁さんを両腕で強く抱きしめながら身体を反転して嫁さんを

組み敷き、唇に軽いキスをした。

問題ない。

だから興奮していざ唇を深く重ねて舌を強引に忍ばせたところ、俺の舌は

容赦なく噛みつかれた。

いや、これは噛みつくというか・・・食されようとしている。

「び・・・びいっつっ・・・!!!!」

上下の歯に挟まれた舌を引っこ抜こうとするが嫁さんの噛む力の方が強すぎて

一向に抜けない。



「べええっ・・・べえっ・・・」

俺は今最高に情けない顔を晒している。だがそんなこまけえこったあどつても

よすぎて、これはマジで俺の舌が喰い千切られてしまいそうな予感。

え？俺の舌は食われちゃうの？牛タンと違うのよ？！

「びっ！・・・びえ！！・・・」

口を開けすぎて顎が痛くなってきた。

だらしなく垂れた涎が嫁さんの唇に当たりピンク色の唇が更に艶やかにになっている。

ああ・・・凄く欲情しちゃうんですけど！なんで俺馬鹿みたいに舌出して

はあはあしちゃってんの？

どんなに顔を上げてても舌を噛んでいる歯から抜け出せず、両腕で口を開こうとしても

全く微動だにしない

（ていうか開かねえ・・・）

「ばばい・・・ばばいばあ・・・」

舌の痛みが徐々に強くなり何だか鉄の味までしてきたもんだから、さすがに俺も手段は選べなくなってきた。

「・・・ぼべん・・・ぼべばん・・・」

嫁さんに一応の謝罪。

嫁さんは全く何にもしてないのにね。ただ嫁さんはいつもの習慣で口の中に入ってきた

人間の部位は何でもご飯だと勘違いしちゃう、腹ぺこさんなんだよな。

それを知ってて舌を突っ込んだ俺はただの命知らずの若き色欲魔。

だから・・・だから本当に誠に勝手ながら失礼いたします。

「・・・」

俺は顔を降ろすと、円を描くように両腕を動かし己の胸板の下へそつと腕を忍び込ませ、

そしてやんわりと赤子に触れるような優しい動きで手の平を降下させて大きな大きな

二つのお山を包み込むと、親指と人差し指の距離をゆっくりと縮め

ていき、

指の間に挟まれた二つの山の小さなピンク色のお家。ではなくて、ピンク色の小さな丘を二本の指でじつくりと摘まみ上げそして勢いよく弾いた。

「っ・・・・・・・・！！！」

嫁さんの身体が震え、一瞬だけ口が開く。

その隙に俺は全速力で顔を上へあげて上下の歯で噛まれていた舌をなんとか救出。

助かった・・・助かったよ俺・・・。

込み上げてくる来る涙が頬を伝う。

今の気持を表すなら海洋パニック映画でラスト30分前ぐらいにいきなり船に

波が押し寄せてきて「うわー！！！」と叫んだまま消息不明、司令塔にいた人間全員が

「死んだ」と思い塞ぎ込んで出るところにモニターから流れる俺の声と共に壮大なBGMが

流れ出す。

そんな映画のワンシーンのような気持だった。

うん、メチャクチャ分かりずらくて大変申し訳ないのだが。

「・・・雲ちゃん・・・？」

「はっ！」

気が付けば嫁さんが目を覚ましていた。しかも少し頬が赤くなっている・・・。

「あ・・・いや、あの・・・これは・・・」

「私、雲ちゃんの上で寝ていたと思ったんだ、けど」

「ぐ・・・ぐぐぐぐぐっ、誠にすみませんでしたぁ！！！！！！」

おかしな日本語を叫びながらその場で土下座を決める俺。

しかし何てナイスハプニング。頭を下げたところは大きなお山の山間部で顔が

大きなお山に挟まれちゃってるぅ！げえへへへへ。

「夜這い？」

「違っよー！！」

突拍子もない発言をされてしまったので否定するため直ぐに顔を上げてしまった。

俺はなんて馬鹿なんだ。

「でも、私、また雲ちゃんの下に・・・」

「あ・・・いや、これは違うんだ。実はさっき嫁さんが寝返りを打って、

そのままベッドから落ちそうになったから受け止めようとしたら・・・

まあこんな感じになっ・・・ちゃっ・・・て・・・」

自分で喋りながら話の展開があまりにもご都合主義過ぎて、出来の悪さに

苦笑してしまう。

「そう、なの？」

「・・・そうなんです」

「ふーん」

「・・・」

やっぱり信じて貰えていない。

当たり前か、嘘なんだし。

嫁さんはきつと言いつつがましい俺のこと軽蔑しているんだろうな・・。

「・・・ま、いいか」

そう言っただけ嫁さんは俺の身体を優しく抱きしめてきた。

だから俺も嫁さんの細すぎる身体を優しく抱き返す。

「雲ちゃん」

「ん？」

「好き」

「・・・ありがとう・・・」

本当はキスをしたかったけど、先程のことがあるのでそれは断念して嫁さんを

抱きしめたまま身体を逆方向へ反転させて、再び嫁さんを俺の身体の上に寝かせると

頭を撫でてあげる。

満面の笑顔を見せてくれる嫁さん。やはりこの位置が一番落ち着く。

幸せな気持ちを噛みしめながら、俺たちは再び眠りについた。

## 裏切の美德

2 色目

『裏切りの美德 5』

・・・それでもやっぱり君がそんな顔をするのはとてもよくないことだ。

夕方。ホテルから出てきた俺たちを出迎えたのは一人の男の遺体だった。

「げえっ！」

俺たちがいたホテルの目の前で倒れる同じ制服の男。この顔に俺は見覚えがある。

えーっと・・・確か・・・

回想

「おい、弟塚」

声を掛けられたので顔を上げれば同じクラスの・・・えっと・・・  
なんとか文則・・・？が俺の席の前に座っていた。



あれ、俺の前の席って違う奴じゃなかったっけ？

「なんだよ。俺今忙しいんだけど」

「金貸してくんない？今日、弁当忘れちゃって」

「悪い。俺、今月色々と厳しいから他人に貸す金は持ってないんだ」

「そっかー・・・残念。じゃあ他の奴に頼むわ」

そう言っただけでなんとか文則は授業中にも関わらず部屋の中を歩き回り、クラスメイトに金の無心をしていた。

（三色パン 2色目 「裏切りの美德2」より抜粋）

回想終了

・・・そうだ、なんとか文則！何コイツこんなところに？

「うつ・・・て・・・弟塚あ・・・」

「な・・・なんとか文則！！しっかりしろ」

慌ててなんとか文則に近付く俺。嫁さんはつまらなそうに突っ立っていた。

「へへへ・・・やられたぜ・・・。お前の後を追ってきたら・・・

まさかこんな・・・」

「何で追ってきたんだよ！授業どうした？」

「・・・俺・・・俺・・・実はお前のこと・・・ずっと・・・あ・・・

い・・・」

「は？」

「・・・て・・・た・・・っ・・・」

言葉を言い終えると満足そうな表情で息を引き取るなんとか文則。

なんか最後の言葉を解読したくないんだけど、まさかこいつ

俺のこと・・・！！？

「・・・弟塚あああ・・・」

「え？」

顔を赤らめているのも束の間、俺と嫁さんの前方に現れたのは見知らぬ女。

手にはナイフを握りながら左右に揺れながら徐々にこちらに近付いてくる。

何だこの女。俺たちのクラスにこんな奴いなかったよな？・・・多分。

「あんだ誰だ」

名乗りそうも無いので聞いてみると、女は素直に答えた。

「・・・かえりざくら 帰桜 令明・・・」

・・・誰・・・？やばい、全然わかんねえ。

「弟塚ああ・・・。貴様ああ・・・！！！！よくもおお・・・

私のおおお・・・素敵羅くんをおおお・・・！！！！男の純情をおおお・・・

踏みにじりやがつてええええ・・・！！！！」

素敵羅すてきら？すてきら？ステキラ？ステキヤラ？捨てキヤラ・・・。

回想

「うつ．．．て．．．弟塚あ．．．」

「へへへ．．．やられたぜ．．．。お前の後を追ってきたら．．．

まさかこんな．．．」

「．．．俺．．．俺．．．実はお前のこと．．．ずっと．．．あ．．．

い．．．」

「．．．て．．．た．．．っ．．．」

「金貸してくんない？今日、弁当忘れちゃって」

回想終了

「そつだ！素敵羅 文則！そつだ、それだよ！そついう名前だ  
つたな、



弾丸のような速さで俺たちの方へ飛んでくる帰桜。

武術の心得など何も持っていない俺はとりあえず逃げようと思い嫁さんの腕を掴むが、

嫁さんの足がその場を離れようとしなない。

「嫁さん、逃げよう!!」

「・・・」

足がすくんでいるのだろうか。

人肉食ってるけど・・・やっぱり女の子なんだよな、嫁さん。

・・・なら俺は!!!

「嫁さんは俺が守る!!」

なんの武器も盾も用意していないがそれでも俺は嫁さんをあの女から守らなければいけない。

だからこのデカいだけの図体で嫁さんの盾にならなければ。

意を決して嫁さんの前に立つ。

目の前に迫ってくる帰桜。あのナイフ、果物ナイフかと思ったが結

構ゴツイ形を

している。

「くっ……」

刺されたら痛いのかな……。なんて弱気な心を愛の強さで握りつぶして立ち尽くす。

すべては嫁さんの命のため。

「……雲ちゃん……」

弱弱しい声で俺の名を呼ぶ嫁さんの声。

大丈夫、大丈夫だよ。俺が君を守るから。だから心配なんてしないでいい。

「……雲……ちゃん……」

背中から感じる嫁さんの温もり。こんな状況でも構わず俺に抱きつく俺の大切な嫁さんは、

やはり世界一可愛い。

俺は気持ちを引き締める。

例えば自分がどうなるうが、嫁さんだけは必ず生きて家まで帰すんだ  
!!!!

「大丈夫・・・怖くない・・・!!!!」

「・・・」

「・・・えいつ」

・・・ん？



力んでいた俺の身体。

その場で踏ん張っていた身体が後方から突然押された。そんな気がした。

・  
・  
・  
いや、押されたんだ。

だって腹にナイフが刺さってるもんね！

[illegible]

えええええええええええええええええええええええ  
え！！！！」

痛い、痛すぎる。どこぞの主人公みたいに「くっ！」なんてカッコいい台詞なんて

でないよ！！

だって今俺の腹に刃物がぐっさり刺さって血が垂れて頭に血が登って、

この状況を認めたくないけど腹が痛いからこれどう見ても現実でそれを実感したら

顔から熱が消えて顔面蒼白状態だし息も碌に吸えないしで・・・ああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

あああああ！！！！ていうか抜けよ！！

「っ！っ！くっ……くっ……っ……！！」

これはきつと夢なんだと思い、霞んだ瞳で腹を見るとナイフが俺の腹の中に

しっかりとINしていた。

ああ、もうダメ。

「くっく……くっく……！」

┐  
•  
•  
•  
?  
└

腕も上げると血が出そうで怖いから両目を必死に瞬きして瞳を霞みモードから

クリアモードへ変更して再度腹を見たてみたらやっぱり腹にはナイフが刺さっているが

刺している人間も何故か慌てていて、

よく見てみれば嫁さんの白くて細い華奢な手が帰桜の腕を握っている。

「よ……嫁さん……？」

「雲ちゃんごめんね」

「え？」

「私、刃で手を切るのが嫌だったから」

「……」

成程。あー……うん、まあ俺はさっきから自分で盾だとか守るんだとか

言っていたからこの結果に文句は言わないことにしよう。

うん、例えば俺が頑張ってナイフの刃を漫画みたいに手で受け止めよかと思つて

ただ嫁さんの勝手で俺が人間鞘にされた、なんて微塵も思わ

ないんだからね！

「抜けないっ！！！」

帰桜が叫ぶ。先程から何度も腕を引こうと試みているが全く動いていない。

嫁さんの表情からは読み解くことが出来ないが、相手がこんなに腕を動かそうとしても

ビクともしない

ってことは、実は結構な力で握っているのか？

「離せっ！離せってば！！！」

「・・・了解」

そう呟くと嫁さんは空いた右腕をゆっくりと上に上げる。

「捕食」

声と共に振り下ろされる腕。同時に帰桜の腕も俺から離れる。

だがナイフは刺さったまま、帰桜の腕は肉体から切断されて宙に浮いていた。

・・・え？まさかの手刀っすか？嫁さん。

「ひぎゃあああああああああああああああああああああああ

ああ！！！！」

一瞬の出来事で状況が理解できていなかったのか10秒遅れでやつと叫びだす帰桜。

腕から放射される大量の血液が嫁さんの身体を赤く染めていた。

赤く染まった手には小さなお手製の鉋。

・・・ああ、思い出した。あれは俺たち3兄弟が君ヶ主3姉妹に恋をする前に

俺たちの親父が嫁さんのために作ってあげたと言っていた手製の小型鉋だ。

サイズはカッターナイフ位の大きさだけど一般人が誤って手を切ったら

5本指全部が削ぎ落されるというトンデモ小型鉋。

まだ使ってたんだ、あれ。

「あつ・・・」

そういえば親父の奴、このトンデモ小型鉋を作ってから数日後だったかな・・・

親指すっぽり無くしてたんだよねー……。

あれきつとなんかの拍子で鉈を滑らして切断しちゃったんだろうな。  
バカな親父。

そんな昔の記憶を思い出しながら俺の身体は地面に向かって倒れた。  
した。

「雲ちゃん？」

嫁さんの声が遠くから聞こえるけど返事が出来ない。

ごめん嫁さん……なんか俺……眠くなつて……き……

花屋で買い物をしていたら誰かの悲鳴が聞こえた。

でも私には関係ない。誰がどうなるうが知った事じゃない。

私は商店街を出てあの子の居る所へ向かった。

## 裏切の美德

2色目

『裏切りの美德 6』

何を食べても美味しくなくて食べるのをやめたら私の身体はどんどん細くなっていた。

私は食事を楽しいと思ったことが一度も無い。何でもみんなあんな熱い味のないものを食べて笑っているのだろう。私は分からなかった。

「そう・・・だから何も食べようとしないんだ」

「うん」

「でもこのままじゃ、君は倒れてしまうよ？」

「それでも私は構わない」

「君が倒れてしまったら・・・僕たちはとても悲しい」

「ごめんなさい」

「謝らなくていいよ。・・・うん、じゃあこうしよう」

「？」

おじさんはそう言って手に持っていたナイフのようなもので自分の左にある

親指を切り落とした。

「おじさん？」

「食べてごらん。もし君がそういう子なら、僕たちもこれから君に合った食事を

用意することでしょう」

「・・・」

差し出された指を何の迷いもなく口に入れる。だって、とてもおいしそうに

見えたのだもの・・・。

「学校を抜け出したと聞いて探してみれば・・・。

相変わらずやってくれたわね、玄德」



食事をしているとお姉ちゃんが彼氏を連れてやってきた。

「お姉ちゃん」

「状況を確認したいのだけれど」

そう言ってお姉ちゃんは私の横で眠っている雲ちゃんとさっきからうるさい

女の方を見る。

「えっと・・・雲ちゃんが寝ちゃった」

「子考、救急車を呼びなさい。まだ死んで無さそうだから」

「畏まりました、我が主」

「あと、その女が突然叫んでこっちに来た」

「その女って・・・この子、あんたと同じ学年の子じゃなかったかしら？」

確か同じ道場にいた気がしたんだけど・・・名前は覚えてないわね」

「よく分かんないけど、そっちで倒れている男のことで雲ちゃんにケンカ吹っかけてきたの。マジつざい」

私がさっきホテルから出てきたときに雲ちゃんが声を掛けていた男の方を指差すと、

お姉ちゃんも顔をそつちへ向けた。

「・・・誰あれ？」

「知らない。雲ちゃんになんか話しかけていたみたいだけど、私、早く帰ってたから、何を喋っていたのか聞いてない」

「ふーん・・・。あれは・・・放置しておきましょう」

お姉ちゃんの目がまた倒れている女の方へ向けられる。

「お姉ちゃん？」

「うーん、今思い出したのだけど。」

確かこの子、武術の才能は結構よかった気がするのよねえ。

間違えていなければ数年前の大会で優勝していたはずよ」

「へー」

心底どうでもいい話を始めるお姉ちゃん。

でもお姉ちゃんの記憶の中に微かに居たってことは、この子きつとおねえちゃんのだ

タイプなのかも。

「お持ち帰りする？」

「うふふふ．．．どうしようかなー．．．」

そう言いつつもニヤニヤしているお姉ちゃんは、結局この女をうちへ連れて帰った。

きつとこの子も来週からお姉ちゃんの部隊の仲間入りだな．．．。

翌日、朝。

雲ちゃんは病院で入院しているから朝のお迎えは無く寂しく学校へ向かう。

途中までお姉ちゃんと一緒だったけど彼氏が来たから邪魔しちゃいけないと思い

その場でお姉ちゃんたちと別れて一人早めに登校する。

雲ちゃんが居ないと寂しいよ．．．。

「．．．」

いつも以上に気持ちがダウンしていく。

こんな日は翼徳の身体に付いた匂いを全力で嗅ぐに限る。

「よし」

少しだけ気分を上げて教室の扉を開けた。

誰も挨拶しないクラスの中、いつもならすぐに声を掛けてくるはずの翼徳の姿が無い。

「……?」

今日は遅刻でもしているのかな。そんな気持ちで席に着こうとしたら腕を掴まれる。

掴んだのは子龍。珍しく髪の毛に寝癖が付いている。

「おはよう、子龍」

「……玄殿……」

挨拶もしないで私の名前を呟く子龍の姿を見て、胸の中で何かが疼きだしてきた。

「昨夜、翼徳が……」

「……どうしたの?」

分かっているてもその答えを自分からは言いたくないから、意地悪して子龍に聞いてしまう。

本当に・・・私はいつまでたっても最低な奴だな・・・。

「何者かに襲われ、手術を受けたのですが・・・」

「・・・」

子龍の長い前髪から見える顔色は真っ青だった。

そんな姿を見てしまうと昔のことを思い出してしまい眩暈に襲われる。

それでも私は平静を装う。

「そう」

これから起きるであろうことを想像しながら私は子龍や仲間たちに何も言葉を掛けることなく、その日は1時間目の授業も受けずに家に帰り

ベッドの上で眠りについた。

夕刻、私が通うはずだった高校の前を通る。なんだか寂しい気分になったけど

獲物を見つけた瞬間、そんなのどうでもよくなった。

迷うことなく、私は捕獲作業に移る。

・・・あ、捕獲じゃなくて・・・、

・・・そう、これは狩猟だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4103ba/>

---

三色パン 2色目

2012年1月10日21時45分発行